偏側患肢患者の健足の扁平足について

国立久留米病院整形外科 佐藤 光雄

The Static Flat Feet of One Side Observed by the Patients Who Have Any Weakness in the Otherside

By

M. Sato

Department of Orthopedic Surgery, Kurume National Hospital

扁平足の成因には先天性のものと後天性のものがあ
り後天性のものには灰白髄炎や外傷等による脊髄損傷
のため起る麻痺性扁平足と静力学的作用による扁平足
があげられる。静力学的扁平足は後天性扁平足中最も
発生頻度が多く扁平足の過半は之に屈す。

扁平足の発生機転は足部の内外長軸穹窿を正常に保
たんとする筋及び靱帯の静力学的能力に過重の負荷が
長期間持続した場合即ち足部構成の能力と静力学的要
請間の平衡破綻が生じた時に起るものである。例えば
長時間堅い石、アスファルト、コンクリート等の床上
に立業を与儀なくされる職業の人即ち理髪師、紡績女
工、看護婦、デパートの売子等に多く扁平足がみられ
るのは前述の如き理由によるものである。従つて未だ
足部の筋肉、靱帯の薄弱な幼少期に下肢の1例のみを
侵された患者に於いて偏側足部に過重な負担が加わる
ことにより如何なる変化をもたらすか、就中静力学的
扁平足が如何なる頻度と程度を以て発生するかに興味
をおぼえ、2、3の観察を行つたところを發表する。

患者の選定に當つて灰白髄炎による者については出
来るだけ詳細な病歴調査及び臨牀検査により麻痺が偏
側に限られたものを選んだ。

測定は横倉氏法により撮影した「レ」線像にて第1
中足骨小頭内側種子骨と踵骨隆起下端とに引く切線の
長さをYとし第1中足骨、楔状骨関節、楔舟、距腿及
び距踵関節の中点を夫々 L. N. C. R. T となし各点の
Y軸よりの高さを $Y=100$ とした場合に換算して正常
足の規準と比較し、正常足平均より上下に各 10 %
以内のものは正常となし、これより低いものを扁平足と
した。

扁平足の頻度は44症例中 24足にみられ 56.8 %を
占め、これを患足の変形別にみると下垂足は7例中6

例、踵凹足は11例中5例、尖足は11例中5例、不良
肢位強直は3例中2例、内反足は8例中3例、麻痺性
扁平足では4例中4例にみられた。

患側変形の程度による健足扁平足発生の頻度は高度
変形 20例中11例、中等度変形のもの 20例中12例、
軽度変形のもの 4例中2例で変形の程度と健足扁平足
発生頻度に差は認められぬ、中には非常に高度内反足
で足背で歩いているような患者でも健足は正常な場合
もあつた。

L. N. C. R. T. 各点の高さの平均値を患側の変形群
別にみると踵凹足はTのみが正常より低く、他は正常
範囲内にある。尖足もTのみが低く他は正常、内反足
もTのみ低く、他は正常、下垂足、扁平足では全ての
点に於て低下がみられる。全例に於て正常より低かつ
たのはT点で、R点も辛うじて正常足範囲に入つたに
すぎず概して後足部の低下が目立つている。これは踵
骨の傾斜角の低くなるためと推察される。

患者の罹患年令は全症例が生後3ヶ月乃至5才迄に
含まれ成人に於て、種々な疾患で偏側下肢に障害を来
した患者で健足に扁平足を少数例しか見ないのと対称
し足部構造の薄弱は扁平足発生の有力因子と思われ
る。

結 語

1. 幼時に於て偏側下肢を罹患し体重支持不十分な
患者の健足に於て 44名中 56.8 %に扁平足がみられ
た。
2. 患肢の変形程度と健足扁平足発生頻度との間に
は関係がない。
3. 横倉氏法による「レ」線計測によると各点中T
の低下が全例にみられた。